ウルリム
響
生野

特定非営利活動法人
聖公会生野センター機関誌
第60号
2014年11月25日発行
題字：康秀峰

URL http://www.nskk.org/province/ikuno　E-mail:nskkikuno@gmail.com　聖公会生野センター　検索

知ることの大切さ

大西　修

今秋三つの集まりに参加した。いずれも実り多く恵まれた研修の機会であった。

一つは滝乃川学園を会場にして開催された、聖公会社会福祉連盟第55回全国大会・主題「滝乃川学園120年史発刊の意義と障害者福祉」、二つ目は済州での日韓聖公会宣教協働30周年記念大会・主題「命（いのち）・正義・平和～東アジアにおける聖公会の役割」、そして三つ目は横浜での日本聖公会人権セミナー・主題「キリスト教信仰と人権」であった。

この三つの共通点は、歴史的事実を正しく知ることがいかに大切であるかということであった。知ることとは、単に知識を習得することだけではなく、自らの生活・生きることとの関わりの中でその歴史的事実を正しくとらえ直すことを意味している。

諸施設に入所しているために偏見と差別の嵐の中で弱い立場に置かれている子どもたち、心身に障がいを抱えて苦しんでいる人たち、ハンセン病のため、全生園をはじめ全国各地の施設で社会から隔離され、人権を奪われ、苦しみの中で生きてこられた人々、高齢のため社会復帰もかなわず、今なお施設の中で暮らしておられる元患者たちのことを、わたしたちはどれだけ知っており、その歴史的事実と向き合ってきただろうか。

知らないことは罪である。知ろうとしないこともまた罪である。この言葉を初めて聞いた時、大きな衝撃を受けたことを今でも忘れることができない。知らなかったから仕方がないでは、済まされないのである。知らなかったため、また知ろうとしなかったために、どれほど多くの人々を悲しませ、苦しませ、傷つけてきたのかを思うとき、深い罪責の念にとらわれるのである。知らずに犯した罪もまた罪である。主の祈りで「わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします。」と祈るが、この祈りの中のわたしたちの罪には、当然知らずに犯した罪も含まれているのではなかろうか。

日本聖公会は1996年5月の第49(定期)総会において「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」を採択した。1984年に第1回日韓聖公会宣教セミナーがソウルで開催されてから、12年経過していたが、その後の協働関係の前進に大きな意味を持つ宣言であった。1910年の韓国併合、戦前、戦中の日本国家による植民地支配、侵略戦争を支持、黙認してきた教会の罪を告白し、神とアジアの人々に謝罪したのである。関東大震災のとき、流言飛語よって多くの在日韓国朝鮮人が虐殺された事実、強制連行、「従軍慰安婦」のこと、済州43事件について等々、その現場に立ち、証言を聞くことなどは本当に知ることに繋がる大切な体験である。

今なお在日韓国朝鮮人に対する差別、人権侵害の言動は後を絶たない。昨今のヘイトスピーチなどはその最たるものであり、わたしたちはこの現実にしっかり向き合い、それに対してNO！と叫ばなければならない。

（おおにし　おさむ　大阪教区主教
聖公会生野センター理事長）

光化門で

香山　洋人

韓国のフェリー「セウォル号」沈没事故では３００人もの犠牲者が出た。大惨事だ。修学旅行中の高校生が多く亡くなったのも衝撃的だ。単なる船舶事故ではなく社会の問題であり、韓国政府の責任が問われる事態となった。裁判、特別法の制定、政治的な妥協、当事者にとってはあまりにつらい過程が続く。７ヶ月を経てまだ見つからない遺体もある。

「真実が知りたい」という想い一つで声を上げ続ける遺家族たちが景福宮の前、聖公会ソウル大聖堂近くの光化門交差点で座り込みを続けている。そこには多くのボランティアが駆けつけ、教会関係者も連帯の断食や座り込みを続けている。「愛する人を失った悲しみだけでも胸が張り裂けてしまいそうな人々が、こともあろうか憎悪を抱かざるを得ないこの現実をいったいどうすればいいのか」。座り込みの現場で耳にした言葉だ。

光化門の座り込みの現場に飾られた犠牲者一人一人の写真をじっと見つめているうちに、一人一人が当たり前の人間であることに気付かされる。家族がいて友人がいて、夢があって悩みがあって、語り尽くせない物語をもつ当たり前の人間だ。数年前、「関東三教区生野委員会」でソウルにある「戦争と女性の人権博物館」を訪ねたときも、女性たちの顔写真を見た。「元軍隊慰安婦」と呼ばれる人々も実は当たり前の人間だ。そして西大門の記念館で出会った壁一面に展示された顔写真、独立運動の渦中で命を絶たれ義士や闘志と呼ばれる人々も、やはり家族がいて友人がいて、希望も悲しみもある当たり前の人間だった。

大災害、大惨事、戦争であったとしても。そこで犠牲になった人々の数が数百、数千、いや数百万、数千万という圧倒的なものであったとしても。それは人間のいのちの数であり、そこには一人の人間の人生という語り尽くせない物語があることを、われわれは決して忘れてはならない。「有事、国益」といった言葉が当たり前のように飛び交う今、人間一人のいのちは大切にされているだろうか。「嫌韓」などと、国単位で物事をひとくくりにしようとする世の中で、われわれは人間一人一人の顔をじっくりと見ているだろうか。軍隊を持ち、戦闘に加わることで、人間の人生は再び捨象され、愛国者とか英霊とか、敵とかテロリストとか、英雄とか犠牲者とか、名前も顔も無い数字だけが再び大手を振ることになるだろう。一人一人が当たり前の人間であるために、平和憲法があり民主主義がある。われわれはそのために歴史を学び、一人一人の顔とじっくり向き合う必要がある。

靖国神社の境内の記念館にも戦死した若者たちの顔写真が飾られている。神としてまつられる「英霊」たちの、軍服姿の凛々しい表情に隠された当たり前の人間の物語に想いを寄せるとき、人間を軽んずる「虚構の大義」の恐ろしさに身が震える。彼らによって打ち砕かれた当たり前の人間の暮らしに、われわれは向き合う責任がある。ナザレのイエスに向き合い続けるわれわれだからこそ、当たり前の人間一人一人にも向き合い続けるべきだろう。

（かやま　ひろと　司祭
東京教区千住基督教会牧師）

日韓聖公会宣教協働 30 周年記念大会で「済州４・３事件」を憶える

松山　健作

４・３平和公園での犠牲者追悼礼拝

自然豊かで「平和」の象徴と称される済州島で開催された日韓聖公会宣教協働 30 周年記念大会に参加した。ここで議論され、語られたさまざまな事柄の一つひとつが両聖公会にとって、非常に重要な宣教的課題・展望であることは、間違いない。私はそのなかでも特に済州島という地域で開催された意義に注目しながら、振り返りたいと思う。

まず率直な思いを一つだけ述べるならば、私はこの大会が済州島で開催されるということに大きな期待を寄せていた。その理由として、海軍基地が建設されている江汀（カンジョン）村に赴き、現地の葛藤に触れ、そこにある痛みを共有するプログラムが設定されるだろうと勝手に思い込んだからだ。その理由は「第２回世界聖公会平和協議会 in Okinawa」との関連のなかで決定された候補地であるゆえ、さらには両聖公会が反戦に向けた強い共通認識をその協議会で声明として発表したゆえである。しかし、実際には私たちに現地を訪問する時間的な余裕は与えられず、事務的な会議や議論などに埋没してしまった感は、否めない。

一方で、非常に印象深かったことは、４・３平和公園にすべての参加者と共に集い「４・３事件」犠牲者の追悼礼拝を執り行なうことができた点である。「４・３事件」は、いわゆる「共産勢力」による「民衆蜂起」と反共権力者による視点で捉えられてきた。しかし、80 年代の韓国の民主化の流れから始まり、80 年代末から真相究明の運動が本格化し、2003 年には盧武鉉大統領の公式謝罪にいたった。未だに全貌は明らかになっていないものも、済州島で起こったこの事件は、一般民衆たちが南北分断に反対するために立ち上がったところに権力側が武力によって押さえつけた事件にしか見えないのである。結果的に、現在まで２万５千～３万人あまりの犠牲者を数えている。私は、この事件が決して日本の植民地と無関係ではないことを認識し、植民地における罪責との連続によって奪われた尊い命の痛みに身を寄せなければならないと実感した。特に大阪生まれ、大阪育ちの私にとって済州島民は、鶴橋などをはじめとするコリアンタウンで生活する人々として身近な存在であるはずなのだ。

４・３平和公園で私の目を引いたのは、自分の母親の死体を前に泣きわめく子どもの映像資料であった。幼児の表情は、母親の死体を前に震えあがり、泣きわめき、恐さからか手をバタバタさせて悲しみを訴えていた。到底言葉では言い尽くせない痛みと恐れが済州島民の多数に降り掛かったことは言うまでもない。「平和」の島と称される背景には、何とも言い難い悲しみと痛みの歴史が存在しており、いまなおも海軍基地建設によって島民が犠牲になっている現実を見ると「平和」という言葉は、ある種皮肉的にも感じられるのである。いずれにせよ、日韓聖公会宣教協働 30 周年記念大会の時に「４・３事件」の犠牲者を追悼できたことは意義深い時間であった。大会の声明では、「両聖公会は、『風の島を聖霊の島に』という、済州教会の宣教ビジョンを共有し、『生命・正義・平和』を求める取り組みを模索する」という決議が盛り込まれた。これら過去と現在の済州島の課題を踏まえ、今後両聖公会によって協働の実現が深められることを祈っている。

（まつやま　けんさく　京都聖ステパノ教会）

日韓聖公会宣教協働 30 周年記念大会

共同声明

共同声明を読み上げる日韓聖公会青年。今回は青年の活躍が目立った大会で、これからの希望を感じた。

「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。
国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」（ミカ書 4：3）

日本聖公会と大韓聖公会の「日韓聖公会宣教協働 30 周年記念大会」は 2014 年 10 月 20 日から 23 日まで、韓国の済州島において日本聖公会首座主教・大韓聖公会議長主教をはじめ、韓国 3 教区、日本 11 教区の主教・司祭・信徒が参加して開催された。宣教協働者・女性・青年の代表らを含め、韓国側 36 名、日本側 51 名、計 87 名の参加であった。

両聖公会は 2004 年に福岡市で開催された「日韓聖公会宣教協働 20 周年記念大会共同声明」に基づき、10 年間にわたり、日韓聖公会青年セミナーや社会宣教に関する韓国スタディーツアーの実施、世界聖公会平和協議会の開催、韓国人宣教協働者の招聘など多様な宣教協働に取り組んできた。

一方、昨今の日韓両国の関係は必ずしも良いとは言えない。領有権問題、「慰安婦」問題に代表される歴史認識など、両国の間には、依然として乗り越えなければならない様々な課題が横たわっている。日本においては、ヘイトスピーチや嫌韓文書などによって在日韓国朝鮮人をはじめ、マイノリティーに対する悪質な犯罪行為が繰り返され、国連の人種差別撤廃委員会からも勧告を受けるような社会問題になっている。

1984 年からの公式な宣教協働 30 周年の節目にあたり、私たちはこれまでの宣教協働関係を振り返り、混迷状態にある時代状況を直視しつつ、この大会の主題である「生命（いのち）・正義・平和」を実践するために、東アジアにおける両聖公会の役割について協議し、さらなる相互理解と宣教協働に取り組むことを決意した。ことに私たちはこの大会が平和の島である済州島で開催された意義と課題（軍事基地・自然環境・歴史）を深く認識した。

1 日目は、朴東信（パクドンシン）主教（大韓聖公会釜山教区主教）の司式、植松誠主教（日本聖公会首座主教）の説教によって開会聖餐式を捧げた。特に済州教会の子どもたちの特別賛美はすべての参加者を感動させた。植松主教の説教は、真の和解と平和の根拠となる「赦し」について改めて考えさせられるものであった。

2 日目は、「過去の歴史に対する反省と信仰的和解と赦し」というタイトルで梁権錫（ヤングォンソク）司祭（聖公会大学教授）の基調講演があり、続いて両聖公会のパネリストがこれまでの宣教協働の振り返りと 40 周年に向けた宣教課題の提案をした。それらを受けて参加者はグループ討議を行った。また、宮城県仙台市および福島県新地町で「ゆこう、核を越えて、東アジアの平和へ」というテーマのもとに開催された「2014 年日韓聖公会青年セミナー」参加者は、「東日本大震災被災者の苦難と痛みの現実を目の当たりにしつつも、その思いを分かち合う中で連帯する喜びに気づかされた」と報告した。

3 日目は、日本聖公会から憲法 9 条・沖縄・原発・ヘイトスピーチ、大韓聖公会から GFS 井戸のほとりプロジェクト（脱北女性支援）・TOPIK（Towards Peace In Korea、南北平和統一宣教）の現場報告があり、全体討議を通して共同声明文を準備した。

そして、私たちは大会中の聖書研究を通して、神は小さくされた者の側に立たれる方であること、またあらゆる被造物の痛みに連帯することの大切さを確認した。

最終日は、4・3 平和公園を訪問して済州 4・3 事件犠牲者の追悼礼拝を捧げ、済州教会における青年たち司式の閉会礼拝をもち、「様々な課題に向けての迅速な実践を」という金根祥（キムグンサン）主教の説教と、兪樂濬（ユナクジュン）被選主教（大田教区）の派遣の宣言をもってこの大会を締めくくった。

私たちは今回の記念大会を導いて下さった神に感謝し、今後の宣教協働の課題として、以下のことを決議する。

① 日本聖公会と大韓聖公会は、継続的な宣教協働のために管区レベルでの計画・推進のための機構を設置する。

② 両聖公会は、人種差別的・排他的極右運動に対する 2014 年の日本聖公会と大韓聖公会の総会決議を受けて、在日韓国朝鮮人をはじめとするマイノリティーの人権を守る働きを今後も継続する。

③ 両聖公会は、日韓の青年交流を活かして、東アジアの苦難と痛みを共にする青年活動に取り組む。そのために日韓両国の関係を越えて青年の主体的な交流を可能にする支援協力体制を整える。

④ 両聖公会は、沖縄・済州島における軍事化に反対し、「第 2 回世界聖公会平和協議会 in Okinawa 声明」の具体化に努める。

⑤ 両聖公会は、「風の島を聖霊の島に」という、済州教会の宣教ビジョンを共有し、「生命（いのち）・正義・平和」を求める取り組みを模索する。

⑥ 両聖公会は、「宣教協働 20 周年記念大会共同声明」に掲げた女性の交流が不十分であったことを反省し、女性が互いに学び合い、協働できる環境を整える。そのための定期的な交流を進め、意思決定機関および諸委員会における女性の比率が 30％以上となるように努める。

⑦ 両聖公会は、東アジアの平和のために南北統一への努力が重要な宣教課題であることを再確認し、TOPIK 事業を通して積極的に協力する。

⑧ 両聖公会は、優先的に両国語による聖餐式を実践するよう努力し、真の多民族・多文化共生社会の実現を目指す。

⑨ 両聖公会は、世界聖公会の「宣教の 5 指標（The Five Marks of Mission）」を共有し、そのひとつである「創造秩序の保存と地球生命の回復と維持」のため、原発と放射能（核エネルギー）問題の深刻さを認識し、信仰の課題として取り組む。

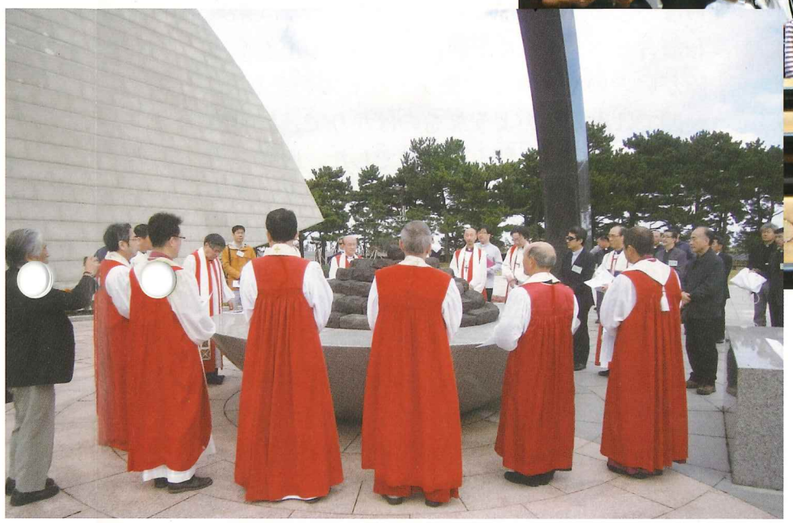
⑩ 両聖公会は、日韓のみならず、東アジア地域を含めた歴史の学びを深め、互いの宣教方策を交換して神学・礼拝・宣教・牧会などの共同研究を継続する。

⑪ 両聖公会は、上記の課題を実現するために祈り、情報交換や資金確保に努め、その進捗状況を毎年確認し、10 年後の 2024 年に上記の内容に対する評価の機会を持ち、それ以降の宣教協働についての協議を行う。

2014 年 10 月 23 日
日韓聖公会宣教協働 30 周年記念大会共同大会長
日本聖公会首座主教　植松　誠
大韓聖公会議長主教　金　根祥
参加者一同

日韓聖公会宣教協働３０周年記念大会

↓ 位牌奉安殿での祈り（済州４３平和公園）



↑ 済州教会の子どもたちの合唱

韓国のお餅作りしました

大阪教区礼拝

ぷうる寄席のお手伝いしました

こみち寄席盛況です

ヘイトスピーチに抗する

仲良くしようぜパレード 2014(7 月・大阪)

こどもプログラム

今も続くヘイトスピーチ（9月・大阪）

滝乃川学園から学ぶ

芦田　聡

今回私は聖公会生野センターより初めて聖公会社会福祉連盟の大会に参加させて頂きました。幼少の頃父の仕事の関係で東京の武蔵小山駅に住んでいた頃もあり、当時のイメージを沸かせながら、「滝乃川学園とはどのような所なのだろう、やはり大阪とは違って都会なのだろうか」等と考えながら新幹線に乗っておりました。東京の一つ手前の品川に着いたあたりで、昔よく父に散歩に連れて行ってもらったことを思い出しながら外の景色を見ておりましたらやはり都会的で、ビルの多さに圧倒されてしまいました（私が働かせてもらっている聖公会生野センター付近ではこのようにビルが多く建てられている事はありませんので）。これは滝乃川学園も都会的な場所にあるのかなぁと思いながら電車を乗り継ぎ目的地である矢川駅に到着すると、そこはわりと静かな街で私のイメージとは違っておりました。

滝乃川学園に到着するとまずその敷地の広さに圧倒されました。建物等は古いものから新しいものまで多種多様で、歴史の中で様々な変化をしてきたのであろうと感じさせるものばかりでした。初日は講演会と石井亮一・石井筆子に関する映画の上映会でしたが、どんな困難があろうとも一貫して立ち向かう姿勢は、福祉という分野に限らず見習わなければならない部分だと感じました。何事も努力と継続が一番大切な部分だという事を痛感させられました。

研修２日目は①国立ハンセン病記念館②東大和療育センターの２ヶ所を見学いたしました。国立ハンセン病センターでは、昔ハンセン病患者として、様々な根拠なき差別を受けておられたというお話を聞かせて頂きました。体調があまりすぐれないのか、時折座って休憩しながらお話をしておられましたが、最後まで当事者として経験した事実を赤裸々に語りかけられている姿を見させて頂き、真実を伝える事の大切さ、また社会や政治が表面的な部分のみの情報しか流さない中で、多角的に物事を捉えなければならないという事を理解させて頂きました。東大和療育センターは都が運営しており、重度重複障がい者のトータル的なケアをしていました。民間では出来ないようなものばかりで、施設及び設備の充実さに驚くばかりでした。研修２日目の最後には、研修参加者と関係者が多く集まり交流会が開かれました。私からあまり積極的に話をすることは出来ませんでしたが、自己紹介の中で、施設活動の中で音楽活動（ジャズ）が盛んであると伝えたところ、偶然にも同じくジャズを活動の中に組み込まれておられる方がおりまして、お話をたくさんして頂きました。三重県で活動されているのだそうですが、いつか交流も含め当事者の方と参加させて頂きたいと感じました。

研修３日目は障害者福祉とキリスト教というテーマでシンポジュームが開かれました。福祉施設での現況や、キリスト教と福祉についての様々な意見を聴きました。私個人はキリスト教の信者ではないですが、教えを信じている方も、そうでない方も、結局は現在起こっている事象に対してどのように行動するかが大切なのではないかという事を考えました。

【最後に】

聖公会生野センターは今後どのように歴史作り上げていくのか、現場にいる間は日常的な業務に追われあまり意識しないのですが、振り返ってみると私が勤めている７年間の間に、良くも悪くも大きな変化はありました。今後どのような風に変化していくかは現場にいる私たちにも解りませんが、外から見た時に良いところだと言われるような活動をしていければと思います。

（あしだ　さとし　聖公会生野センタースタッフ）

夏の実習を振り返り

姜 炯 俊

去る８月21日から９月11日まで、自分は聖公会生野センターにおいて聖公会神学院の夏期実習をさせていただきました。３週間という、長くも短くも感じるその時間の中で、自分は大変色んな事を学び、また教わりました。この機会を借りてその中で自分が感じたことを皆さんに少し分ちたいと思っております。

私は韓国の大邱（テグ）というところの出身で、韓国で生まれ、20代の半ばまで韓国の中で育った韓国人です。日本に来る前まで、日本にいる私の同胞たち、在日コリアンと呼ばれる方々に会う機会もなく、私が在日コリアンについて学ぶことができるのはメディアと本だけでした。日本に来ても、あまり在日コリアンの方々と出会う機会がなくて、自分としては在日コリアンの世界は「未知の世界」でもありながら、正直に言いますと「出来るだけ、触れたくない世界」でもありました。

ですので、今回の実習は自分にとっては大きな挑戦でもありました。「韓国人でありながら日本で聖職として仕えることを志している自分としては一回ちゃんと在日コリアンの方々と向き合わなければならない」と思ったのが、今回の聖公会生野センターでの実習を決めた理由でした。

３週間の間、聖公会生野センターの様々な活動に参加し、聖公会生野センターの色んな方々と交わりを持ちながら、そして聖公会生野センターだけではなく、地域の様々な在日コリアンの諸活動と施設の働きに関わりながら感じたことは、自分自身が今まであまりにも無関心であったということです。

在日１世の方々の苦労話、何もない状態で日本に来てどれほど苦労しながら生きて来たか、そしてその息子、娘の方々が在日というアイデンティティを大切に思いながら自分たちのアイデンティティがちゃんと認められる社会をつくるためにどれほど努力してきたか、いわゆる若い世代と呼ばれている若い在日コリアンの方々が抱えているアイデンティティの問題や新たな差別的状況に対する不安感、時には生々しく、時には冗談も加えながら、私に話してくれた在日コリアンの方々のストーリーの中には、私のような韓国の人々が長い間無関心で、あるいは警戒心で一貫して来た在日コリアンの熾烈な歴史がありました。そんな歴史を持っている兄弟姉妹に対して、自分自身は同胞と呼んでいるものの、何も関心を示せずに、彼らの声を聞こうとも思わなかった自分のことを深く悔い改めています。

今回の実習を通して私の宣教・牧会に対する考えに大きく変わったところがあります。以前の私の中には私の召命を「日本人に神の愛を宣べ伝える」ことであると思っていました。しかし、今回の実習を通して神様が見せて下さったのは、日本には日本人だけではなく、自分のアイデンティティに悩み、それを大切に思いながらすべての人たちが幸せに生きる社会をつくるために努力している人たちがいるということでした。神様が示してくださったその感動に応えて今は私の召命を「日本に住んでいる人々に神の愛を宣べ伝える」ことであると思っております。

今回の実習を通して得たもの、在日コリアンの方々との出会いとその中で神様が示してくださった自分の召命を大切にしながら、この世の一番低いところまでお下りになったイエス様に習い、自分も、泣く人々と共に泣き、神の愛を言葉と思いと行いで証する者として生きて行きたいと思っております。

（かん　ひょんじゅん
聖公会神学院３年次　横浜教区）

在日済州人と済州方言と私

一番右が金寶香さん

金　寶香

済州方言は韓国語の古語の姿をたくさん持っているので、国語学研究者の関心の対象になってきた。四面が海で囲まれた済州は他の地域と離れている孤立した島で、外部の言語変化の要因が遮断されていた。それで済州方言にはすでに他の地域言語から消えた韓国語の古語の形態多く残っている。

ところが急激な社会変化は人間の意識の変化はもちろん言語まで変化させた。産業と交通の発達で人々の移動と接触が頻繁になり標準語の教育、大衆媒体の影響で地域方言は標準語で単一化されていきつつある。済州方言も例外ではない。それもそのはずで私が学校に入った時、「先生」が使う言葉は家で「母や祖母」から聞いた言葉と違った。学校では授業時間にはもちろん、友だちと遊ぶ時間にも「なまり」を使わないことを強要された。そのうちに「標準語」は「美しい言葉、高級な言葉」、「なまり」は「やぼったい言葉」というイメージになった。

2012年12月、ユネスコは済州方言を老人世代だけで制限的に使う消滅危機に置かれている言語であると発表した。この発表は自分たちが言葉に関心を持たなかった済州の人々に警戒心を呼び起こした。言語はその話を使う人々の「固有性」を表現する手段だ。言語が消えるということはその話を使う人々の「固有性」が消えるということだ。済州方言は済州の人の固有性を現わすことだ。最近済州では済州方言を守るための努力に力を注いでいる。

日本で済州方言を聞くことができるということは済州で生まれ成長したが、標準語教育を受けて育った私にとってちょっと特別だった。しかしこの人たちには当然であることであった。「済州の人とか済州言葉が分かることだね。」ということだ。

何年もの間、私は在日済州人一世たちの済州方言を収録して調査している。 調査して会ったある一つの方は私に「済州語を済州で調査するべきでなぜここに来て調査するか?」である。

当然なことだ。方言をその方言を使う言語圏で調査するべきだが、私は日本で済州方言を調査している。いや、かえって日本で済州方言を勉強しているわけだ。たびたび在日1世のハルモニ（おばあさん）の話を聞いて何の話かわからない単語はメモをする。そして戻って方言辞典を引いてみれば載っている。済州で生まれて40年近く過ごして聞いてみられなかった済州方言だ。

日本で済州出身の方々に会えば「済州のどこで来はりました？」と尋ねて挨拶する。それでは「ああうち（済州島）の言葉韓国語分かるんやね」と歓迎して下さる。済州の人々に済州方言は「うちの言葉」に通じる。初めて会った人でもこの「うちの言葉」で相手に対する警戒が消えて親近感ができる。これが「故郷の言葉」の力であるようだ。

（きむ・ぼひゃん　済州大学在日済州人センター研究員）

金寶香さんは済州大学在日済州人センターの初代の専任研究員で聖公会生野センターにもしばしば訪問されます。「方言」「固有の地方の言葉」が故郷遠く離れた大阪生野の1世の中に残っていることは「宝物」ではないでしょうか？その世代が今や高齢化を迎えています。

海慶打令（ヘギョン）　柳海慶・語り／韓我路・編著（風来舎）

磯貝 治良

日本による植民地支配が始まって間もなくに朝鮮で生まれた母とその娘の〈在日〉史を描いたドキュメントふうの小説です。とは言っても、主人公・柳海慶の語りを丹念に聞き取り、調査して、在日二世（現在は韓国在住）が作品化した「合作」です。

母・金珠美（キムチュミ）は1912年に慶尚南道陜川（ハップチョン）の山に囲まれた貧しい寒村で生まれた。作品は珠美が夫とともに釜山から北陸の敦賀に向けて荒波を渡る場面から始まる（このときの荒波はその後の母娘の人生を表象するかのようだ）。着いた所は北海道の美唄炭坑だった。娘の海慶は1931年、そこの炭住で生まれた。

海慶が1歳のとき母娘は国へ帰る。夫の柳東（ユトン）夏（ハ）の家系は、豊臣秀吉の朝鮮侵略の当時、名宰相として歴史に名の残る柳成龍につながるとのことだが、故郷には正妻と子どもたちがいた。娘・海慶をうばわれるようにして正妻の家に引き取られてしまう。唯一の生きがいである娘と引き剥がされた嘆きは（のちに娘と生活を共にするとはいえ）、悲嘆の人生を予告する。

作品の語りはやがて娘・海慶の〈在日〉身世が軸になる。恨み多い人生は母のそれをしのぐかのようだ。その大半は男のエゴと背信によるとも言える。同胞男性との三たびの結婚。女あそび、バクチ、ギャンブル、嫉妬、吝嗇そして暴力。異郷暮らしの鬱積がなせる業とはいえ、連れ添った男たちの不実が海慶を追いかける。

その背景には〈在日〉が置かれた社会条件の問題もあった。たとえば「日韓条約」が締結する以前、在日者は本国の戸籍制度が整っていない場合もあって、婚姻届や出生届けを行なわず、男の「二重婚」を許してしまう。海慶がその被害にあった事実が語られている（作品には歴史的背景なども編著者によって簡潔に挿入されている）。

語られる個人史の過酷さが読者を圧倒するが、生きしのいだ母娘の後半生はそれなりに落ち着きも感じられる。

海慶は一人暮らしながら友を得て、オモニたちの識字学級に通うようになる。母娘には長い道のりを支えになってくれた新井のアジュモニとその娘・靖枝がいた。三人目の夫との修羅場から靖枝に救われた海慶が、公園のベンチで呟く、「みんな終わったわ」。なんでもない一言だが、海慶の人生を辿ってきた読者には胸に迫る感懐がある。

『海慶打令』は一人の〈在日〉女性が辛酸を舐めながら強く変容していく道程でもある。

一世女性の話を聞き、物語を読んだりすると、男から受ける受難の例は多い。そんななかで時に笑い飛ばし、時に罵り、夫を手なづけて、恨（ハン）を浄化していく。やむにやまれぬ強さとはいえ、半端なそれではない。

本書の「まえがき」でも語り部・柳海慶は有余る恨みをかかえて、編著者の文章に不満を述べている（原稿が最終段階に至ったとき、その不満は解かれるが）。評者わたしは、この1冊の手法を評価し、〈在日〉女性の人生の軌跡が残されて、後世代に伝えられることが嬉しい。

（いそがい　じろう　在日朝鮮人作家を読む会代表）

＊この作品は自費出版ですので一般には流通していません。聖公会生野センターで取り扱っています。送料込みで1,300円を郵便振替で送金ください。その際に住所・お名前を明記してください。

口座名　特定非営利活動法人聖公会生野センター
口座番号　00910-1-321780

コラム・一粒の麦

新たな『峠』に向けて

大町　信也

神学生時代（1983-85年）、私は川崎市を流れる多摩川の河川敷に住居を持つ在日の子ども達の勉強をみていました。丁度、指紋押捺拒否運動が盛り上がりを見せる時期と重なります。指紋押捺という現実を間近に控えた若い仲間たちと、私は少し勉強し、夜遅くまで語り合い・疲れ果てるまで遊び、皆で銭湯の最終に飛び込むというような毎日を送っていました。私の教え子の一人に起こった小さな事件です。戦後詩人の一人である真壁仁の「峠」という詩を扱う国語の時間の事でした。詩の中の一節「峠には明るい憂愁がある」それをどう思うか？と、教師が質問しました。思わず手を挙げて見回してみると手を挙げているのは自分一人。

彼女は答えました。「明るい憂愁の、憂愁とはつらかった過去の事です。明るいとは未来に開かれた希望の事です。」と・・。彼女は、恥ずかしげに、ちょっと自慢げに私に報告してくれました。卒業証書を本名で受けたいと願い、本名宣言をしたばかりの彼女でした。あれから30年、彼女たちの世代の子ども達が青少年となり、ヘイトスピーチに晒されている。日本の暗澹たる現実に、この間、私たちが取り組んで来た事は一体何だったのか？と、怒りと悔しさに胸が破れそうになる。越えなければならない「峠」。それが、今また目の前にある。

（おおまち　しんや
北海道教区司祭・北海道外キ連事務局長）

余韻

■この秋は２回済州島に行った。日韓聖公会３０周年記念大会とアジア国際夏期学校の済州平和ツアーである。両親の故郷でもある地に毎年訪ねているが、行くたびに島の変容に驚く。いつもどこかで道路の拡張工事がされていて、「オルレキル」と言って、歩いて済州島を楽しむ人たちの姿が多くなり、海外の観光客は日本よりも圧倒的に中国からの人が占めて、トイレが整備され、洒落たカフェが増えた。訪れる人には快適な環境が整いつつあるが、済州島で暮らしている人にとってはどうなのだろう？済州島の固有の歴史、済州４３事件の傷み、海軍基地建設を通した平和の問題等に関心を持つ人は少ない。そして済州方言も消滅の危機にある。私の父母の島は今後どうなっていくのだろうか？海外にいるディアスポラの一人として気になる。■沖縄で選挙があった。かの地の人たちは「基地はいらない」という選択をした。それを大切にしたい。いい加減「本土」は気づくべきだ。選挙報道を通して「沖縄のアイデンティティ」がイデオロギーを越えていることに感慨を持った。日本という中での少数者の沖縄の人たちと同じく少数者の在日の共通点を思った選挙だ。（ピックァンチャ）

お詫びと訂正
前号（第59号）でヘイトスピーチの管区決議にの提出者に大阪教区の代議員の山本眞司祭のお名前が抜けていました。ここにお詫びして訂正いたします。

聖公会生野センターへのご支援をお願いします
◇正 会 費　年額　１口 10,000円
◇後援会費　年額　１口　3,000円から
・郵便振込00910-1-321780「聖公会生野センター」
◇自由献金・クリスマス献金
・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
・銀行振込 三菱東京ＵＦＪ銀行 東大阪支店
普通預金　4654965「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0002
大阪市生野区小路３丁目11番19号
TEL06-6754-4356/FAX06-6224-7869
E-mail: nskkikuno@gmail.com
http://www.nskk.org/province/ikuno
発行人：大　西　　修

ウルリムは再生紙を使用しています。